

最終講義
「服飾美学と私」

山崎 稔恵

人間共生学部共生デザイン学科 教授

2024年1月23日(火) 13時15分~14時55分

金沢八景(室の木)キャンパス E1号館502教室

「服飾美学と私」

はじめに

- ・服飾美学とは
- ・もっとも心惹かれたこと

I. 18世紀イギリスの画家ウィリアム・ホガースとの出会い

- ・《一日の四つの時, 朝》(版画, 1738年)の女性
閉じた扇を口元に当てて覗き見る行為とその表象



William Hogarth, *The Four Times of Day, Morning, 1738*
(detail)
© Trustees of the British Museum

- ・18世紀イギリスにおける扇
‘little Instrument’ ‘little Machine’ ‘Toy’
- ・服飾と気取り
ヘンリー・フィールディング
『ジョウゼフ・アンドルーズ』の序において論じられた
「気取り」
→ 「滑稽」(Ridiculous)の根源は
「気取り」(Affectation)

「この世はなべて舞台, 男も女もなべて役者」
(シェークスピア『お気に召すまま』)
人間の行動スタイルにおける虚構性と演劇性

人間に宿命的な二律背反する願望——顕示と隠蔽
他者との関係において気取るという自覚的営み
これを肯定的に捉えるか否か

II 須賀敦子『ユルスナールの靴』との出会い

- ・「ぴったり足に合った靴さえあれば, じぶんはどこまでも歩いていけるはずだ。そう心のどこかで思いつづけ, 完璧な靴に出会わなかった不幸をかこちながら, 私はこれまで生きてきたような気がする。行きたいところ, 行くべきところぜんぶにじぶんが行っていないのは, あるいは行くのをあきらめたのは, すべて, じぶんの足にぴったりな靴をもたなかったせいなのだ, と。」(プロローグより)

・靴の記憶を通して語られる須賀の心の旅

・「ぴったり足に合った靴」のイメージ

- ・須賀が求めた理想の境地—ゆるすぎることもきつすぎることもない, 調和の取れた靴
→ たましいの奥にまっすぐ届くような強靱さをそなえた文章への到達を意味する
語彙の選択, 構文のたしかさ, 文章の品位と思考の強靱さ

服飾の問題の妙味

ありふれた日常の, 何気なく見過ごしてしまいそうな着衣・着脱の体験や記憶がいかに意識化され, 機微や肌理に触れる洞察がなされるか

Ⅲ. 18世紀イギリスの女性メアリー・ディラニーとの出会い

- ・「ディラニー夫人とその仲間たち」展
(サー・ジョン・ソーンズ・ミュージアム, 2010年2月19日-5月1日)
メアリー・ディラニーとは
- ・展覧会をめぐる論評
- ・展示された夫人の作品とその背景
ニードルワーク(刺繍)/風景画/ペーパーコラージュ/ペーパーシルエット
刺繍の図案が日々の野外での行動や観察, スケッチを通じて編み出される
サイエンスへの関心がアートに結実
- ・なぜ夫人はニードルワークに拘泥したのか
- ・夫人が求めた美意識センシビリティ

センシビリティ (Sensibility) とは, 18世紀イギリスのひとつの美的概念
美や真実を鋭敏に捉えてゆくセンスであると同時に「ポライトネス」な社交性や社会性を
示す美德として賛美

- ・感性的営為としてのニードルワーク
センシビリティを求める夫人にとって, ニードルワークは理想の女性像を表象するもの
哲学者エドモンド・バークは「いつの世にも輝かしい女性」と称賛
- ・暮らしのなかの感性的営為とそれを捉える美意識
センシビリティはつくる側だけでなく, 見る側にも求められる



Detail of front petticoat panel, designed by Mary Pendarves, 1740-41, Private collection. . [Yale 2009, 67.]



Outline drawings of sprigs of flowers for embroidery by Mary Pendarves, ca. 1740, Private collection. [Yale 2009, 6.]



Mary Delany, 'Passiflora Laurifolia,' 1777, @ Trustees of the British Museum

[Yale 2009] Mark Laird and Alicia Weinberg-Roberts ed., *Mrs. DELANY & HER CIRCLE*, Yale University, 2009.

おわりに

- ・私にとって服飾美学とは, 研究とはいかなるものであったのか